

今年の応募は一般部門42編、ジュニア小学生が1編、中学生が5編だった。高校生の応募がなかったのは残念だ。年々減少傾向にあった一般部門が20編ほど一気に増加したのはコロナ禍の影響もあるのだろうか。

一般部門の選考には選者がそれぞれ10編程度を持ち寄った。三人が共通して選んだ作品が2編、二人が4編、一人のみの作品が11編。選んだ作品が散らばったのは、テーマがバラエティに富むことと、作品の出来に差が少なく甲乙付け難いのが理由だろう。どの作品にも一長一短あり、選者の基準も微妙に異なるため、すんなりと決まることは少ない。特に一席と二席の順位づけと、残った11編から佳作2編を選ぶのに時間を要した。

一席「野球ボールと大人になった私」は中学生の時に埋めたタイムカプセルを卒業15年目の同窓会で掘り返すという内容。飾らない静かな筆致で、同窓会への参加の迷いや不安、同級生に会えた喜びや悲しみ、劣等感など様々な感情を正直に書いている。タイムカプセルに入れた野球ボールの使い方が上手いし、平凡な自分を肯定し受け入れている点も共感できる。生き方に決まりはないのだから。二席「生き方のヒーロー」は病弱な中学生ヒロ君と塾の講師である筆者の心の触れ合いを描く。歴史上の人物や人の生死などをテーマに対話を重ねるうちに繋がっていく二人。教え子の成長を見守る筆者の視線が優しく好感が持てる。

ジュニア小学生部門の「私と百人一首」は、百人一首を通して一步步つ成長していく姿を描く。構成も上手いし、文章も読みやすい。1編のみの応募ではあるが、例年の受賞作と比べても何ら遜色なく、選者の意見が一致しての一席となった。中学生一席「価値のある当たり前」はコロナ禍で常識が覆された世界をテーマに、何気ない日常の大切さを説く。自分の意見をぶれずに表現している。

手紙でも日記でも、書くことで自分の頭と心を整理し、不安やストレス、困難を乗り越える力になり得る。これからも一人でも多くの人に書き続けてもらえることを願う。